

---

# 女の子にメールを送ってみた

しゅーくり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女の子にメールを送つてみた

### 【Zコード】

Z7279E

### 【作者名】

しゅーくり

### 【あらすじ】

主人公の唯一の知り合いの女の子に友達にいたずらで『今から会おうぜ！会つて伝えたい事があるんだ！』とメールを送られてしまつた。それから友達は自重する事なく勝手にメールを続ける。そして主人公は好きでもない女の子に告白する事になつてしまふ。そゆ一話です。元ネタ知ってる方がいるかもしれません笑小説化してみました。でも設定とか色々変えちゃつてるんで・・・まあ一つの恋愛小説としてお楽しみください

## 登場人物（前書き）

登場人物紹介です。

設定は覚えてもらつてた方が楽しめるかなー  
新しい人物が本編で登場しましたら  
付け加える予定であります。

## 登場人物

神谷 かみや

諒 りょう

高校2年生。

彼女なし。

甘いもの大好き。

テンション上がると暴走氣味になる。

霧島 きりしま

麗 れい

高校2年生。

彼氏なし。

神谷と学校は違うけど近所。

容姿は可愛いけど田舎っ子。

男性恐怖症らしい。

## 登場人物（後書き）

次回より本編になります。  
お楽しみください。

一回目・女のナレーメールを送つてみる。（前書き）

本編1話です。

## 1回目・女の子にメールを送つてみる。

高1。春休み目前の日曜日。

男友達4人が俺の家に来ている。

「なんか飲み物飲む?」

「おーっ。さんきゅ」

「俺」「ーラがいい」

「あつたらね」

2階の自室にみんな集まっているから1階の冷蔵庫に飲み物を取りに行く。

冷蔵庫の中にはオレンジジュース、牛乳、おはぎがあった。コップとオレンジジュースのパックを持つて2階に上がる。友達Aが俺の携帯を持っていてその周りで3人も俺の携帯を覗き込んでいる。

「なにやつてんの?」

別に見られて困るようなデータはない筈だから携帯を勝手に見られて怒るような事はしない。

ジュークをコップに注ぎ終わつた後に俺も携帯を覗き込んでみると皆が見ていたのはアドレス帳だった。

「霧島麗・・・これって女?」

「あー。そうだよ。それが?」

「神谷、女のアドこの人しかいないじゃん」と笑われる。

「女のアドなんて知る必要ないし」

「それじゃこの唯一、アド知ってる霧島麗との関係は?」

「まさかの彼女?」

「近所の人だよ」

「へえー。タメ?」

「うん」

「学校どこ?」

「南高じゃなかつたつけ?」

「女のアドは必要ないのになんでこの人だけアド知つてんの?  
そういうえばメアドをどうやって聞いたのか覚えてない。」

「覚えてない」

別に、最近会つてないし、メールもしてないし

「なんだよー。せつかくメール出来る女友達なのに~。  
神谷にとつてアド知つてる女の子つて貴重じやん。

もつたいねえ。てか可愛い?」

「だからしばらくな接点ないんだって。言ひやえれば友達以下じゃね?  
顔は~・・・俺が最後に見たときは普通に可愛かつたよ」

「ふうん。友達以下ならメールしてみていい?」

そう言つて、友達Aが俺の携帯を操作し始めた。

「ん?どゆ意味?」

俺が携帯を覗くと、メール作成画面で  
本文には

『今から会おうぜ!』

会つて伝えたい事があるんだ!

と打たれていた。

「これを麗ちゃんに送る氣かつ!?

「麗ちゃんつて呼んでんのかよー。結構親しくね?  
まあ、うまくいけば神谷くん初彼女かもよオー?  
振られてもどうせ接点ないんだしプラマイゼロしちょ。』

送信つと

まさか本当に送るとは思つてなかつた。  
俺がみた時には既に送信完了の画面が。  
いくら好意のない女の子だからと言つても  
ご近所だぞ・・・

しかもずっと会つて無かつた上にメールをえしてなかつた  
男からいきなり「今から会おうぜ！」

会つて伝えたい事があるんだ！」

なんてメールがきたら誰でも引く。

俺が絶望していると友達達が叫ぶ。

「おっ！返信きたし！」

「んーっと。

『今からお昼だからちよつと・・・

2時以降じゃダメ？』

ええエエー！

「会つていーのかよっ！」

「おー。良かつたじやん

いい感じだよー」

「俺は『きょっ！いきなり何？

もう2度とメールしてくんな！』って来るのかと・・・

「そーてど。なんて返信しようかな

流石にこれ以上こいつらの勝手にさせとくとまずい。

俺は携帯をひたくつて直ぐ返信をする。

『ちよつと話したかつただけ

と送つた。

そうすると直ぐに返信が返つてくれる。

『そーなの？

じゃあ2時から暇だし会いますか？』

え・・・？

予想外の返信だった。

周りで見ていた友達が面白そつに携帯を奪つて  
なにかを打つて送信した。

「おこづ！」

なんて送った！？

「すげーいい流れだつたから『すきだ』つて送つたー

「ナニ!?

2 罷から寺

「時から暗めに会いたがっておきたいが、それ以前に・・・もう、色々おかしそうだろ!」

「でも返ってきた。」

『どの二つの意味のすきですか？？』

完全に友達達は樂しみまくつてる。

も「うん」でもなく「あまあま」・・・

「ねーねー。ちくわぶつておにじいよな。つて送つてみてよー」

持参したのか、ちくわぶを食べていた友達が言った。

ちくわぶとは・・・知らない人も多いだろうがそういう食べ物があるのだ。

「おーつ。いいねえ。」意味不さが

みんな爆笑してやがる。

俺は笑えねーんだよ・・・

まじでちくわぶはねーだろ・・・

てが麗ちゃんはちくわふなんて知ってんのか…

終わるだろ？。

「うおっ。返信きたあ！」

『ちくわ~おでんは好きだよ』

だつてさ。なんだこの子みや。ちやんと返信してくれるとか神か??.「やつぱちくづぶ知ひばいっつー!

・・・麗ちゃんはどんな気持ちで返信してんだ?

## 一回目・女のナビメールを送つてみる。（後書き）

ちくわぶは関東の方は知らない方は多いかもしませんね～・・・  
気になつたら検索してみてください 笑

## 2回目・超展開。（前書き）

超展開はいりまーす。

これが田舎っ子クオリティ！

## 2回目・超展開。

「頑張つて話あわせてくれてんじやん。  
意外と神谷のこと好きなんじやねー？」  
もう俺にはなんもわかんねーや。

「俺だつたらこんななんぜつて一返信しねーよ  
相変わらず回りは爆笑してるし。

「次、返信どうする？」

「俺的にはこれ以上変なこと言つてると  
まじで返信になくなるかもだから話戻したほうが良いと想つ」

「あつ！俺いいこと思いついたつ！」

おでんも好きだけど、俺が言いたいのは  
俺は君のことも好きなんだって事。

つて送るーぜ」

また周りは爆笑する。

「うわつ。くせえ。てか何気かけえしね。

それ才能だろ」

なんかとんでも無い事になつてる。  
てかもう俺のキャラつてなんなんだ？

「よし。送るよ」

「あつ。ちょいタンマ。

付け加えて

こんなことメールで言つ事じやないと想つから会いたいんだけど  
我慢できなかつた。」めんね。

いきなりこんなこと言われても困るよ

つて付け加えて

「いいねえー。

もつじの際ついでにあつひがざつぱりんのかも聞こえやねつぢ

「よじ。んじ。せや

『おでんも好きだけど、俺が言いたいのは、俺は君のことも好きなんだって事。

こんなことメールで書ひ事じやなこと思つから会いたいんだけど、我慢できなかつた。

ごめんね。

いきなりこんなこと言われても困るよね。  
でも、君の気持ちを知りたい。自信ないけど・・・。  
嫌だつたら無視してくれてもいい『

ちょい長文だけど送るよ?』

「凄まじい文章だな」

「嫌だつたら無視してくれてもいい。とか何様だよ  
「純愛じやん。泣けてくるわー」

そつあから俺は一言も喋らない。いや、喋りたくない。  
てか、これつてまさか本当に会つことになつたりしないよな?  
俺は関係してないと言つてもおかしくない筈なのに・・・。  
あれ? もつぢーなつてんだ?

しばらくして携帯が鳴る。

そういうえば俺の携帯なんだづけ・・・

『『』』めんなさい。

会つて話したいです

今日何時くらいならいいですか?』

つて・・・』

「なんだソレ! 超展開じやねえーか!

神谷! もう会つて話して来い。初彼女だぞ!』

「これ俺等がキュー・ピットじゃね?』

「こや。

あつひは俺達がおちよくつてる事を察して

度が過ぎすぎてるから、それに怒つてリンチする為に会おうって言つてる・・・という可能性も・・・

「あー。ありえなくも無い話だな」

「ちょっと様子見るためになんか送るかすきだ。はさつきつかつちやつたからなあ

「愛してる。でいいよ」

「わかった。『愛してる』

・・・・送信完了』

もう友達が何考えるのか分からぬ。

本当にリンチだつたらされるの確實に俺じゃないですか。

しかも、また返事になつてないし。

全然様子みられねーし。

「いつか絶対返信』になくなるつて

「つおつ。これでも返信きたよー

『えつと・・・

神谷くんが今日の時間決めてください』

「流石に愛してるへのつっこみはなかつたな。

まあ返信がきただけでもおつけ。

とりま、そろそろ時間決めるか

あのー。会うのつて俺だよね？

俺は会つてもいいつていつてないんだけど。  
てかあんな意味わかんないメールしといで  
会うとか・・・

ほんと、俺つて何？

「『俺は何時でもいいけど・・・

つて返信しといたぞー」

「てかさ、結局神谷が会うの?」

「それ以外ないだろ」

「あつ、神谷。

「こ」はお前が決めていい。  
もしも会つたらどうする？

- 1、俺達がやつた冗談でしたーって言ひづ。
- 2、麗ちゃんのことが本当に好きなんだって言ひづ
- 3、その他

でもな、俺達は飽くまで協力してんだからな  
そりやどーも。

でも、俺に恋愛感情なんてないんですけど・・・  
「諒にとつても2がいいんじゃね？」

諒つて上の下くらいのイケメンなのに  
女と関わり持ちたがらないから彼女できないだけなんだから。  
もうこのでいっそ付き合つちやえば

「『3時で大丈夫ですか？』

つてきたよ

「わかつたよ・・・

会つてみる。

てか会つてやるよ・・・。もう

てか、もう1・2・3で選ぶ答えは決まってるようなもんだ。  
今更冗談でしたーなんて言つたらこくらの麗ちゃんでも  
本氣で殺されるかもしねない。

3のその他つて・・・

なにすりやいいんだよ。

よつて2を選ぶしかないようだ。

2なら告白しても玉碎ですむだけだらづ。

一生メールできなくなるだらうけど。

「マジで！？じやあ3時に会つ約束するよ？」

「・・・いいよ」

俺、ノリ良すぎ。人良すぎ。

2回目・超展開。（後書き）

次回  
告白、そして・・・

### 3回目・坦白（前書き）

リンチか？…？リンチなのか？

流れで、神谷はヤケになつて告白しちまひ。

果たして結果は…・・・

その後、3時に会つ約束をした。

「俺の家は自由に使つていいから。  
絶対、ついてくるなよ」

「分かってるよ。がんばれよー。」

時間あつたらメールで報告しろよ~

それから2時半に家を出た。

だが、俺は気付いていなかつた・・・  
目的地まで5分でついてしまつところとことを。

2時40分に約束の公園到着。

やっぱ早すぎたな・・・

てか、本当にくんのかな?

そういうえば告白しなきやいけないのか。  
そんな事を考えながら待つていると

10分も経たないうちに麗ちゃんが現れた。

早いなあ。と思いつつ

「おはよう

と挨拶をする。

「おはよ。待つた?」

そう聞かれる。

「いや。つていうかまだ約束の時間じゃないし

「そうだね」

さつきあんな気持ち悪いメールしてたのに普通に話せるよ・・・  
でもこれからリンチつて可能性も・・・

そんな俺の思いとは裏腹に

公園のベンチで「久しぶりだねー」とか話した。

緊張していく意識して見れなかつたけど

改めて麗ちゃんを見てみると可愛くなつていていた。

「長くなりそうだったらうちで話す？」

「俺は別にここでいいけど」

「でも、雨ふりそつだし。おいでよ」

この流れで麗ちゃんの家に行く事に。

あつ。でもこのまま家でリンチつていつ可能性も・・・  
家に行くまでは会話がなくて、そのせいで  
被害妄想が更に膨らみ物凄く怖かつた。

麗ちゃんの家のコンビングに通された。

昔に何度かきたことがある。

麗ちゃんがコーヒーをだしてくれる。

「あ、ありがと」

「コーヒーを入れてもらつた後、物凄く気まずい雰囲気になつた。  
これも全てメールのせいなのか？

「コーヒーを何口か飲んだ後に麗ちゃんが口を開いた。

「さつきのあれって・・・いたずら？」

「え？ あれって？」

みすつたああ。

分かつてていることぼけてしまつた・・・

「・・・好きって言つやつ

麗ちゃんの顔は軽く赤い。

ふう。

ここまできたらやるしかないか・・・

「いや、俺はかなり本気なんだけど」

「だつてちくわとか言つてたじやん・・・」

「そういえばちくわぶとか送つてたな。

そりやいたずらと思われても仕方ない。つてか実際

いたずらな訳で。

どうやって弁解するか・・・

「あれは照れつていうか、ちょっと誤魔化そつとしただけでー。」

キタナ。

流石、俺のフォーカク。上原もビックリのキレだぜ。

「そりなの？」

「うん」

納得・・・してくれたのかな？

まあここでちよつと念を押しとくか。

「本気だから」

別に恋愛感情があるわけでもないんだから結果がどうであれいいんだ。

友達も結果なんて気にしちゃいないだろ？

「あたしのことが好きなの？ほんとこ？」

「うん」

「ありがと」

「ありがと～」めんは良く聞くけどありがととは？

「ありがとう？」

俺にはわからない事だらけで、つい聞き返してしまった・・・

「ん・・・神谷くんはあたしのこと、何で好きなの？」

「何でそんな事聞くん？」

うわっ。俺さじてーだ。応えられなかつたしつ！

「気になるから。最近会つてなかつたし  
なるほど。

つてか、どじが好きかなんて考えてなかつた・・・  
ここを流すことは出来なそうだ。

「良くわかんないけど、前からすきだった。  
麗ちゃんって優しいし

全く。俺の口は。

しばらく俺は麗ちゃんの顔を見れずについた。  
麗ちゃんも黙つたままだつた。

### 3回目・四回目（後書き）

ジラース。

軽いいたずらの筈が何故か告白につ。

結果は次回！

#### 4回目・結果、理由　「これから」

そして20秒くらいの沈黙が流れ麗ちゃんが言ひ。

「ありがと……。嬉しいけど、『めんなさい』

・・・・・

・・・・・

・・・・・

うは。もう。しんじやおつかな。

もともと好きだったわけじゃないけど、流石に少し期待した分ショ

ックでかい。

「うん、そっか、いや、いいよ……」

何故か泣きそうになつてゐ俺。

またしばらく沈黙があつて

「神谷君のこと、嫌いじゃないよ」

うん。ありがと。嫌われてはないんだね。うん。  
彼女なりに慰めてくれてるんだ……

今度は俺が言う番だ。

「ありがとう。

いや、いいよ。ほんとこ

目の前にあつたコーヒーに口をつける。

「あたしね、ダメなの

ん?

麗ちゃんはもう殆ど泣いているように見えた。

「男の人と付き合うとか、良くわかんないもん……怖い……

ああ。本当に俺のことが嫌いだから  
振つたつうわけじゃないのね。

ここである考えに至つた。

この子メンヘラージやね?

「」で言葉をかけなければと彼女に言った。

「えっとね、大丈夫？」

「うん」

「そう……」

またしばらぐの沈黙。

「話聞いてくれる？」

そういうつて彼女は涙で濡れている田代ひづちを見た。  
正直可憐い。

「どうぞ」

「」まで流されたらもう海まで行つてやる「じゃないか。  
俺はとりあえず話を聞くことに決めた。

「男の人怖いん？」

「・・・うん」

普通は「」で終わるとこりだが、話を聞くといった以上突っ込まなければ。

GO！俺のチキンハート。

「何で怖いの？」

「神谷くんはしないけど、暴力ふつたりするじゃん？それに・・・

「それに？」

「男の人って口汚いから・・・」

やあ、皆さん。男性全員否定されました。

「だから嫌いなの？」

「嫌いじゃなくて、怖い」

「男と付き合つたこととかもない？」

「ないよ」

うわ。まじでメンヘラなんじゃね？

振られたり理由が判明したところで、少し気持ちが楽になつた。  
「いや、でもさ、うん」

男はみんなそんなもんだよ。とか言おうとしたけどやめた。

俺はもうちょっとといい人でいたいんだ。  
裏切り者の俺を許せ。

「じゃあ、俺もちょっと話すから聞いてくれる?」

「うん」

「麗ちゃんみたいな理由で女の子が男を怖がってたら何もできないと思つよ。」

やつぱりお互いに許容しあつていいのが、男女なんぢやない?「俺は振られた後に未練がましい事を言つキモイ男かよ。」

そういうと彼女は黙る。

「麗ちゃんももうちょっと考え方変えないとダメだと思つよ」

あれ?俺、ここに何しに来たんだっけ。

「・・・・分かつてる」

「分かつてるけど、納得できないの」

「まあ、わかるけど・・・」

「皆彼氏いるけど、あたしだけいないし・・・」

「怖いから?」

「うん・・・」

このまま話しても2人きりだから助け舟は出ないし・・・  
時計を見ると5時に差し掛かっていた。

「あ、えと・・・・

日も落ちてるしそろそろお邪魔したほうがいいかな

スライムは逃げ出した。

「なんか食べていく?」

しかし、回り込まれた。

ポツキーとか色々出してくれた。

食べながら話す。

「今日は『めん』」

とつあえず謝つておく。

まあ、ほんとはいだすらじじめんなさい。なんだけど……  
でも、今回のことでのよつと好感を持てた。

「あたしも」めんなさい……」

「いやいや、麗ちゃんは悪くないよ。

それ何か説教みたいな事も言つちやつたし

「あたしの事嫌いになつた?

「なつてないけど?」

「まだ好き?」

「うん」

光の速さで答えた。

ここはそつしつくべきなんだつてと思つて。

綺麗な流れじやないか。なあ。

そしてこれからバイトだからといつ理由で、メールする約束をして

帰つた。

結果だけ見ると俺は振られたんだな。

まあ、初めと終わりがあれだつたから、泣くような失恋ではなかつたけど。

(一部泣き声になつたけど)

## 5回目・助人（前書き）

前回見事に告白に失敗した主人公こと神谷諒。だがその後の展開でまだ望みがあることがわかる。

## 5回目・助人

帰つてきてからはもう俺の家には誰もいなかつた。  
そりや予定の時間より遙かにオーバーしたんだからな。

それからバイトに行つたりでなんだかんだ、落ち着くのが夜の11時だつた。

一応友達にはメールで今日の事を報告しておいた。

そしたら

『お前と付き合えない理由は男性恐怖症なんだろう?  
だつたらもつと親しくなれば確実に落とせるじやん。  
一度振られたぐらいで諦めるな』

・・・

まだやるんですか。

まあ、メールする事になつたんだからとうぶんは続きそうだな・・・  
あいつらがいたずらメール送つた当初ほど嫌というわけじゃないし、  
いいんだけど。

そんな事を考えていると早速麗ちゃんから  
メールが来ていた。

『バイトお疲れ様。

時間大丈夫でしたか?』

『ありがと』

時間は全然大丈夫』

『そつか、よかつた

メールこないから嫌われたのかと思いました』

ふと、思つたんだけど何で敬語なんだろう。

『嫌いにはならないよー

ていうかまだ起きてたん?』

『ありがとう・・・

うん、ちょっと『

そういうえば俺つて女の子と遊びに行つた事ねーよ。

『ちょっと？

どうかした？』

『えと・・・何でもないです

今日はもう寝るね

神谷くんも暖かくして眠つてください

おやすみなさい』

今考えると

「ちょっと？

どうかした？』

はないな・・・

俺は今のメールの流れをさつきの友達（和義くん）に送つたら

和義メール『それだからお前は・・・』

俺メール『ジエントルメンとしては、これはどう受け取るべきですか？』

和義メール『一生起きてくんないことでは？』

やっぱ、永眠ですか・・・

とりあえず麗ちゃんにフォローメールをつ。

『何がごめんね

明日またメールしてもいいかな？

おやすみなさい』

送信！

上出来だ。

そういうれば和義とはビックリするほどイケメンでもうひと女子の子  
からももてもタイプである。<sup>かずよし</sup>

そんな方が俺の友人なんてビックリだろ？

さて、今の完璧メールを和義に報告すると、

『寝る相手に質問すんな』ときた。

・・・・

しまつたああああああ

あ、でも返信キタ。

『してくれるの？

だつたらじょうね、おやすみなさい』

結局寝るみたいだ。

一応これも軍師の和義君に報告した。

『そんなメールに返信してくれるとはいい子だな～・・・

今更だけど、麗ちゃんって結構好感もてる子なんじゃないだろ？

田舎独特純粋さが良いな』

それは俺も思います。

もう再アタックするしかないな。

でも再アタックとなると今度こそ俺のチキンハートをフル回転つて  
ことになるな・・・

俺の考えを和義に送ると

『とりあえず、再アタックはしばらく考えなくて良いと思つ。

今日の事で一応連絡とるキッカケができるんだ。

あせりは禁物、相手に気を遣え、普通に友達から始めろ。

それと、エロは厳禁な

『流石は俺の軍師様！

頑張りまっス！

よし、今日はもう寝る。お休み・・・』

こつこつ色々ありすぎた1日が終わった。

## 5回目・助人（後書き）

強力なスケット、軍師こと和義登場。

神谷もやる気になつてようやく物語りは動き出します。  
これは終わりではなく新たな幕の始まりに過ぎない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7279e/>

---

女の子にメールを送ってみた

2010年12月4日14時54分発行